



假名讀

改正西國立志編

中村正直原譯
中邨秋香和解

三

□ 9
4121
3



門 9
4121
巻 3



假名 改正西國立志編第三編 一名自助論

一名自助論

藤原氏曰

④ 陶器の製造

陶器の製造を往古義的拉士岡の地の人にて之
を作り拵らふる事を知る者ありしが、中頃の世
に至り其術全く世に絶え果て知る者更まあら
ざりけるを、福楞察といふ地の人にて拉加、拉
羅備といふ彫像師再び此を發明したり、元來
拉加も勉強して倦き退屈はといふ事を、更
知らざる人ありしが、晝間の常は鑿を手と取

假名讀立志編卷三

一



1514
8



り、其職業ある彫刻を、手許の暗くある頃まで、勤めて日々又怠らざ、夜分又あまば燈火の下にて、画を描く道を學びつゝ、是また甚ど勉めりけり、その彫刻をおす上より、繪を學ぶ事の必用あまばあり、さきども其家貧しけりば、冬といひても、火を焚く力もかけまじ、大きやある籃の中は、木花を推しおきて、夜更に至りば、其足は此中に入し、辛くも寒氣を防ぎしとぞ、拉加を或る時心の中より偶然思ひつきたりし、総ての像の大理

石にて大方彫り刻むものおとども、價貴くしそ得やすらねば、土を焼きて模型を作り、是にて更な像を製せば、石の價を減ずるのこゝろ、其工手間さへ易くありて、大に費用を省くあらんと、是よりこまに工夫を用ひ、度々試み驗しけるが、其後終に薬を合せて、土にて製せし器を焼き、こまに自然の光澤を出し、又其器に彩色を加へて、美しくする法術を發明せり、此後陶器を作する人、世に類稀ある辛抱強き

三個の人をば生い出せり、是を陶工の三大家と言ひて、後の世までも名を轟おせり、其三人の法國の巴律西、日耳曼の薄查、英國の空地烏德まで、此三人の經歷い事も次第を逐ひて後述ふべし、

⑤ 拉那德巴律西

拉那德巴律西を、法國の人ありて、一千五百十年我國永正七年は生る、其父母殊に困窮ありて、郷村の學校の教をさへ受くる事をば得ざり

程あり、かくて巴氏に漸く生長したり、バ、設因的士といふ地に住みて、玻璃と画を描く事を業とし、又其他は土地の測量を以て事を營こ、あまらをもりて其過活をばありたり、妻を娶りて子をさへ得たり、是より後の此等の業を營む分まで、糊口の道も立ち難けむとさるべき道は業をば變んと、その心より心おけぬ、此時代までの法國にて製し出せる磁器は、至りて粗く醜くして、然も其色栗色あるいと粗造

あるものありけまば、巴氏ハバの心をくく、注ツき如カ何ナニよりして上等ジョウある陶器セウキを造ツクり出デさばやと、竊ヒソカに思おもひ起おこしたり、或あるる日事ニジありて他行タギヤウせし時トキとある處トコロに於おて偶然フツ意イ太利タリの陶工セウキウの名人メシなる埴刺デラウの製セせし磁器セキの盃サウキを見ミたる、其美ウツクしくして麗うるはしく、豫う々巴氏ハバの心の裏うらに如此このごとく、あらまほしと思おもひ渡わたり、有あり様さまあるよう、是こより斷然まこと心を決きめて、陶器セウキを工夫クワフし出でさんと思おもひ立ちたり、此時このとき巴氏ハバの單獨ひとりあら、道の遠とほきも、身の

艱難えんなんも更さらに顧かへ厭いとひせ、必ずかならず以太利イタリに赴まき、埴刺デラウの家いえに門第カドとあり、其秘傳ヒデンをも受うくべきあまども、又また如何いかせん其身そのみに、既すでに妻つまありま、子こもあまば、そを振捨ウラて遙遠とほある旅路リョの空そらに出いづべきあらねば、已やむを得えずして、只ただ其心そのこころに、思おもふばありを記標キヒョウと、暗夜ヤミに物を索もとむる如ごとく、水中ミヅの物ものを探たるが如ごとく、五色ゴシキの彩色サイシキを焼やき付つく、薬くすりまゝ白色しろに焼やき上あぐる薬くすりを如何いかにとりて見ミ出しつ、埴刺デラウが製セせらるものより、殆ほとと勝まさ

是る上等の陶器を造り出さんものをと、昼夜
 心を盡しつゝ、工夫又思慮を焦しけり
 斯くて巴氏其思考をもて、思ひ付きたる藥材
 を聚め、碎きて之を細末とあり、市町よりして土
 器を買ひ來つゝ、こまに細末とありたる藥材を
 塗り、飯又竈を築き設けて、此中又入きて焼きた
 りけるを、其思考あたれば、空しく薪柴藥物
 を始め時日工夫をさへ費やしけども、巴氏を
 此工夫を成し遂げぬ、死にとも止まらずと心を

決め始めて飯又作り、竈の家の内又設けし
 のよて其作り方も不充分なまば、此回又更
 外又築き、此竈にて幾回とあり、許多の薪を費や
 して、許多の土器を焼き試みごと、更又工夫の
 効も見えず、空しく財産を費やし、今の妻子も
 養ひ難き甚困窮ある身とあり、さきの斯く
 て、あるべからずとて、以前の業を時々營み、玻
 璃又畫く業をあり、又土地の測量あど、漸
 く金錢を得るに至り、還陶器の工夫より

て忽ち經驗たぬ之を失うひ、復またたび活路くわつろ窮きうする
 に至いたる、この事ことども度重たびかさなりて、後のちより平常つねの
 習あひまの如ごとくありたどし、其後のち薪柴たきぎの價あきいたく登のぼ
 り買かひ著つくまべも非ちざとく、或あるは近所まんどよの燒磚あぶり
 職しやくの竈こまを借かり、又または玻璃がらの竈こま又また就つきつ、多おほくの
 年月種々しづぐ手を更あらへ、様々さまざま工夫くわふを改あらめ、心を盡つく
 て試験たぎをあせども、更さらは一分一厘ぶの切驗あきをば
 得える事ことありき、
 諸もも巴氏はの藥料くすりの調製方あそび、また塗刷ぬり法ほうの具合ぐあひあ

ど、種々しづぐ工夫くわふを異ことせしものを合あせて一時ひととき
 燒やき上げあは、其中うちより工夫くわふの中なかなる物ものも必かならず
 るべしと思おもひ立ち、三百餘あまの土器ちやくを買かひ入いれ、是
 へ夫々それぞれの藥くすりを塗ぬり、玻璃がらの竈こま又また入いれ、四時
 間かんばあり之これを燒やきて、大試験たぎをぞあたりける、
 諸燒もき終しまりて出いし視みるは、三百あまりの數かずの中
 まで藥くすりの漸やうやうく燒やき付つきたるもの、僅わずかは一箇ひとあり
 けるが、燒やあまし熱あつの去いるに從したがひ次第しだい又また其質その硬かた
 く變かりて白しろき色いろをば顯あらはたり、是こゝまで他ほかの色

の焼き付きたるものも彼是ありしが、白き色を
 始めてありけむに、巴氏の喜躍大方ならず、急ぎ
 て之を持ち歸り、其妻ふり示しけり、さき此
 後此法は依り、薬を塗りて焼たきども、いのある
 故より其後の更の切驗も見えざりけり、
 然るども巴氏の志少しも挫けず、昼夜を分たせ力
 を用ひ、今ハ漸く成就の時も、遠るまどと心は
 信じて、我家の傍は更の玻璃竈をば作りたりと
 ども固より困窮の身あるに、其職人を雇ひ入る

る資力もあけむに、其身自ら磚石を運び、其身自
 ら之を築きて造りしむるに、七八ヶ月の月日を費
 やし、辛くも之を築き果つ、さて用ふべく乾きけ
 るに、自ら坩土もて許多の土器をば拵へ作り、之
 は薬料を塗り竈に入し、一昼夜の間竈の傍は在
 り、薪柴を加へて焼きたりしむるに、薬の未だ焼
 き付らむとて、いつしうは夜の明け離れて、朝日
 の光花やあるに、巴氏の顔をば照らしたり、折柄其
 妻某の朝の食事を少許持ち來りつ、是ハ巴氏が

暫時の程も竈の傍を離れ、常之を看候
 る故あり、さて其日夕鳥埒に歸る頃といふ
 きども、藥料の更に焼も著る、其夜も空しく明
 くまは三日目、巴氏の乱ましく髪蓬の如く、垢づき
 汚ましく面色の恰も土に異あらむ身躰さへまよ
 瘦せ衰へて、蒲柳の秋に逢へるに似たる、其志
 の益々堅く、昼夜を分たず竈の傍を暫時も離れ
 ば、第三日目の夜も明け果て、第四日目第五日
 目第六日目と引き續き、夜昼とあく薪を絶え、

焼も續きて、第七日の曉まで毫も怠る事あり
 けまとも、終に藥料の焼も著るさうけり、
 是に於て巴氏も心と思へる様斯く力を盡して
 焼きたまども、猶其効の見えざる、是を必也藥
 料の調製かまた當らぬものあるあらんと是は
 りして二七日、又三七日の間新規の藥を調合
 して、之を十分搗き煉り、土器を買ふべき
 錢あり、之を或る朋友に借り入きて辛
 くも夫々整ひけま、即ても新規の試験、この

之を竈の中に入れて、直ち火を焚き始め
つ、さるは薬の焼き付のせいで、薪柴既に盡んと
はるは、今をまことと緊要の折あるを、いのでの
火力を減ずる事なく、薪柴を焚き續けんと、免
角は思ひ煩らひける。吃と心は思ひ付き、園は
設けし木作の牆を引き抜き、之を竈に投げ入
焚きし、薬の未だ付らざりけまば、巴氏の心は
思へる様、今尚十ミニユートの間、火力を減ずる
事なく、或は切驗を見る事あらん、さら何程

貴きものを、薪とあして試せば、やとて、遂に其
家へ備へ置きたる椅子を取り出し、之を壊りて
火の中はこそ投げ入またま、さまども時間満
たざりけまば、何をか薪とせんと、家の内を見
廻すは、残るは唯度架のみあるを、即て是をも
取離して、竈の中は投げ入まらう、此有様を見て
巴氏の妻子は、發狂やあらたりけんと、驚き懼ま
て逃げ走りぬ、然るは終りの火力は依りて、薬料
最能く焼付きし、巴氏ら則ち火を収めて、之

を竈より取り出は、熱氣漸く退きて冷るは、
 るは、隨ひ栗色あり、既の色は、次第は變じて白
 色とあり、麗は、き光澤を發せしむ、巴氏の喜
 悦面は、溢き急ぎ其妻子をも呼びて之を示しつ、
 是其經驗の始めて成就する時あり、
 斯るは、巴氏の土器を造る工人を傭ひ、之を
 又自身の好むは、隨ひ土器を造らしめ、又自身の
 粘土をもて、古銭の形を形どり造りて、之は藥を
 焼き付けんと思ひ着きたり、然れども貧苦は極

まりて、今の妻子の養育さへもあはれ得難き程に
 至り、又此陶器を造りたりとも、之を發賣は時迄
 ない、尚程合もある事あるは、心あるは、せんと心
 の裏は深くも憂ひ悶へけり、此は巴氏は常日頃
 懇意はあせる酒家あり、財産ある家ありけるは
 巴氏は志を大に愛で、其家にて食事を賄ふべし
 とありけり、巴氏の喜びて之は托し、其家は寄
 食して毎日竈は往き通ひ、其業を營みけり、さ
 るは是までの竈の築方巴氏の心は充たざりけ

まば更まば又また新規しんき又また工夫くふうをあつて、新たあらた又また竈こまを築つくき
立てけるが、其内面うちづらをバブリント以もつへる火石くわせきを
用もちひて造つくりし故ゆゑ又また火ひの勢いきまの盛さかまある時とき火石くわせき忽たちま
ち破裂とち裂れして、迸ほとりたる其碎片そのけりの中うち又また入いり置あきし
土器つちぶち又また皆みな委こく黏ひ著つきたり、さまたち薬料くすりの程ほどよく焼や
き付つき、然しかも光澤くわつさへ善よく發はつたまど、一いつつと
て疵器きずぶちあらぬのあけまは商賣品あうりやうひんとせべき又また非あら
び、六ヶ月餘むつきの艱難くわんなん辛苦しんくも全まく水みづの泡あわとの消きえ
ぬ、

百敗ひゃくばい撓たふまは百折ひゃくせつ挫せつけず、其志そのし鍊石れんせきの如ごとき巴氏ぱしも
此時このときのこゝ大おほき氣きを折をり、深あく自みづから身みを咎とがめて
頻しばしばり又また愁うれひ悶もへけるが、せめて心こゝろも慰なぐさまん
と進すすまぬ心こゝろの駒こまは鞭撻むちち、或あるる日野外ひのへは徘徊はいかいり
しが、自みづから其身そのみを顧かへるとい纏まとへる衣きの鶉衣うすひぬのこ百結ひゃくけつ
身體からだの枯瘦かす骨ほねの之この高たかく、腓肉ひらの脱おちて襪帶むくろを
も、着きくる事ことさへ叶あはぬば、いと浅間あさまくも
衰憊おとろへたり、と思おもふよつけても、妻つまと子この常々つとつと自みづから
の失敗あせを咎とがめて最いとも哀あはれしく歎なげき、又また近隣きんりんの人

人を自己が飽く迄志を改めず、屢斯る厄運は遇
ふを、頑愚ありとて指さし笑ふも皆夫々は理あ
り、いづや一旦舊業を營み、其上更は工夫もあさ
んと、是より復び玻璃は画を描き、又測量の事あ
どあいて、一家の養育を専らあしつゝ、一年計の
月日を経るや、漸く少々の有餘を生じて、聊躰
裁立ち直りしや、再び陶器の事を取り掛らん
と、其業をば營み始めつ、抑巴氏が陶器の製造は
志し始めてより、薬料の試験を成就するまで十

ヶ年其月日を経けるが、其業猶いまだ十分は至
らざりしや、更は兎角の工夫を用ひて、こまを
全く造り成すに至るまで、尚八年の年月を
重ね、其年月の間様々ある失敗は依りて却りて
益を得、薬材の功能、黏土の性質、また竈室の製造
法まで、最も詳細は諳んじ知り、前後合せて十八
年よて、始めて自ら陶工と名称し、造まる陶器を
世上は廣く賣捌く身とあるに至り、或る時巴
氏か人は謂りて言ひけるに、余が工夫の成就せ

ざる其間譬へても言ひ盡し難き種々の艱難辛
苦を受くが、其中より取別て最堪難く苦の
りし、妻子我を恨みつ、口さのあく詬罵あ
りき、固より妻子の我が工夫の難きも易きも知
る事なく、其功勞のいのあるを察せ、只管成
就を急ぎつ、其遲滞をい詬り咎めつ、室を焚き
て其火加減を守り、看る時は當り、屋根あき處に
在る事あまが、風の寒く肌を割き、雨の冷は衣を
濡し、長き夜すら誰一人問ひ慰むる人もなく、

音あふ者の戀猫の妻とふ声の、門守る犬の鳴く
より外はあらじ、或る時は又雨風烈しく立ち
果すべくも非ざまが、已むを得ずして軒の下に
逃避て入り、事もあり、又の半夜は疲勞極まり、
暫時の程も眠らんとて、家は入りたる事もあり
しが、穿てる衣服の志とが濡れ、泥さへ塗きて
甚重く、殊更年來重かる苦勞は、身體も憊れ衰へ
て、立ち歩行くべき氣力もあけまが、酒は酔ひた
る人の如く、匍匐つゝ入りし事さへあり、さるよ

暫時の休息せんとする、我家の内も我心を安く
するは足らぬのちあらば、茲より我身を口さ
おく恨を罵る妻子ありて、其我心を悩まされむ
るは彼の雨風よりも甚だしありき、斯く様々の
憂艱に遇ひても、幸よして死せざりしは、思へば
不思議の命ありきと、歎息しつゝ物語りしとぞ、
巴氏の志既成りて、上等の陶器心の儘に製造
する事を得たりしは、是を以て心は十分ありと
せむ、尚此上の陶器の上は描く模様を精妙くせ

ばやとは是より画圖は心を用ひて、草木を始め鳥
獸虫魚の類を集めつゝ、生たる儘の真形を摸し、
朝暮工夫は心を盡しつゝ、是を其術次第に進
終は微妙の境界に達し、今時偶世に在る巴氏
製造の碗碟缸瓮の類を見るは、其圖甚だ精巧
して、然も風韻ありと云へり、前年英國倫敦にて
巴氏の造る小碟は、一尺二寸許中は一
ツの蜥蜴を画きしもの、賣物に出たる事ありし
に、其代價百六十二封度、凡そ我國の八百餘は當る

是より巴氏バの名人めいじんの陶工たうこうありと世よは廣く評判ひやうばん
 せらまゝに其後そのち意外いがいの事ことよりして不測ふそくの災難さいなん
 とい羅らりよけり、その此時代このじだいは當りてい、歐羅巴ヨーロッパ
 の諸國しよこくとも皆みな今日の如ごとき開化かいけに至いたらば國々こくにの
 王わう其信仰しんじやうする宗しゆ旨しを以もつて、人民じんみんよも信しんぜしめん
 とする風俗ふうぞく免角めんかくは行なはまゝにフランス法國はつこくよてい國王こわう
 の宗しゆ旨しの耶や蘓その舊教きうけうあるを、巴氏バの従おと來と耶や蘓そ新しん
 教けうの信者しんしやよて、常々つとね篤あつく之これを奉ほうじ、世間せけんの人ひとは對たい

しては新教しんけうの尊たつとむべき由よしをば、憚おそる所ところあり述のべ
 たりしを、豫々よく巴氏バを惡にくめる者もの之これを聞きき、尾おは尾
 を添そへて之これを國王こわうに訴うへし、理り非ひを問とひ
 せ情あまあくる、巴氏バを捕縛とらり獄いに下くだして、焚殺ひやがの刑さ
 に行なふべきは定めらまゝに、因故いんこありて幸さいは赦しよ
 免めんを受け、復ふたび家いに歸かへるを得えたり、是より陶器やまがのの
 製造つくり方を、廣ひろく世間せけんに知しらせんが爲ため、種々しゆしゆの書しよ
 を著述ちやうじゆあり、又また星卜せいふくとて占卜うらなをか術じゆつ及び丹たん
 竈かまどとて金きんを煉ねり作つくる法はうあどの、信しんむべきはあら

ざる事を深く述べ、又妖術並に假冒の事おど、固
より有るべき理あらぬ事を、口を極めて論じけ
まば、之を惡みて仇敵とする者まをく、弥増し、
復も異端の宗旨を信する者ありと云ふ名をバ
下して、バスタイルの獄に繋ぎまぬ、此時巴氏ハ
其年既ニ七十八の高齡ニ至リ、明日をル知らぬ
老の身の、然ル固固ニ囚ハまの、憂艱ニ遇へども
其心の勇氣ハ更ニ衰へば益教旨を篤く信じて、
堅固く之を執り守る事、往時藥料の試験をさせ

ト時分の如ク心鋭ク氣盛んにて、聊屈ハ撓ハ様
あり、時ニ法國王顯理第三を巴氏ガ名たる功
ある人よ、然ル其年老ニ至るを憐ま、如何にと
もして巴氏ハ宗旨を改めさせをやと、自ら親
ク巴氏ハ繋ぎまぬ獄舎ニ臨ミ、之ニ論じて言
ひけるハ汝ハ、吾ガ母の女王の代より、吾ガ代ニ
至るまで四十五年の間、年の尾長く事ハ人ニ
て、其年齡さへいと高けま、予ル甚可憐のもの
と思へり、然るニ汝ハ新教を篤く信じて動らぬ

より、衆多の人民汝を容さず、今予は逼りて汝を
刑あぢまを行おこなはんとせり、汝疾あぢちくと宗まう旨しを改あらためよと
らむ、明日あしたを汝あんぢをひやがうて火刑ひやがうを行おこなふ事ことあらんと、
最懇切いそごうに勸すすめけむ、巴パ氏バの色いろを正ただしくして、王まうは
對たいへて言いひける様やう、王まうは僕わつぎを憐あはむとと宣のたまへ
とも、僕わつぎは又更または王まうを憐あはむと参まゐらひるあり、何故なにゆゑあ
まば人民たみは逼せまらると宣のたまふ事、王者まうの言詞ことばと覺あはん
え侍まへらひ、僕わつぎ賤いやき民たみあまど、豫うひ々うひ吾われが命いのちを
もて自然いぜんは任まかする道みちを知しりて、生死いしをもて心こゝろを

ニツは是る事ことあけむ、大王おほまうの爲ためめよ、世よの人
の爲ためめよ、逼せまらると言いふ事、更または侍まへらむと、さら
ば今更宗いままう旨しを改あらたむると然しからぬとの事こと、承うけるべ
き事ことはあらばと心強こゝろくも言いひ放はなちしが、その後のち
幾程いかにもあつて、獄舎いとやの中なかはぞ死ししたるけり
とぞ、

⑤ 約翰弗列德力薄查

薄查バッチャーは一千六百八十五年、我國貞享二年は當り
て、日耳曼ゼルマンのホイランドと言いふ地ところは生うまへり人

よて、其年甫めて十二の時伯林と言ふ地ある、或る製煉の薬舗の家の弟子とありて、其家ニ在りて製煉法を學びける、元來薄氏の性質より製煉法を好まけき、其術ニ勵み勉むる事一形あらば、僅ばありの閑暇どもあまは、其經驗を爲す事を心掛ける、中ニ殊更常の金属を製して、黄金と爲すべき法もやあらんと、極めて是ニ心を傾け、數年の間力を盡して、様々工夫を用ひける、毫も功驗の見えさせけるより、即て自ら詐

りて年來工夫せし煉金術を、今回始めて發明せりと言ひあつ、其師と頼む薬舗の主人の面前に在りて銅ニ薬料を加へ、竊ニ手訣を以て之を黄金ニ取替て示しけき、其師を始め側ニ在りし人々其詐とい思ひ知らず、薄氏こそ銅を製して全く黄金と爲せ術を發明したと感入あり、此事早くも新聞とあり、西ニ東ニ傳聞しつゝ、大評判とありけき、いづや金を煉る術を發明したる、少年の容貌を見れば、遠近の老若男女

多人數來りて此藥鋪の前まへに集り、混雜こんざついせん方
 多き程あり、此時分とくぶんり小普魯社國プロラシヤにて金貨甚だ
 乏しくして、極めて困窮こんきゆうせし時ときあきば、其王弗列
 德力第一世デリキチダイセイら此事ことを遙とほく聞きて大に喜び、自ら
 親しく薄氏ハツシと逢ひて、委まかしくことと語るべき旨
 を仰せ下さまけき、薄氏ハツシは即ら其術あつを以て銅あがねよ
 りして製せしものありとて、黄金一塊こゝろひとくわいを献上けんじやうせ
 し、王ミヤは之これを見てますく喜び薄氏ハツシを聘めし
 て大に用ひ、スバンドーの堅城こゝろましろの内うちに於て黄金

の製作場せいさくばを作り設け、此こゝにて金を煉ねらしめんと
 既すでに用意よういを施ほさまけり、然しかれども薄氏ハツシは王ミヤの志こゝろの
 如何いかありと言ふ事ことも測り難く、又其詐偽さごの露顯ろけん
 せば如何いかある罰ちがひを蒙まるべきも知るべからねば、
 免とても角かどても召よび應こたへ難くと竊ひそかに逃のがれて塞
 楯せきでんの國境こくけいに奔りつ、維丁堡ウイデンベルクの地ちに至るよ、塞楯
 の君主おんきみある波蘭王弗列德力ポーランドミヤフレデリキら豫よ々薄氏ハツシが黄金
 を煉る術あつを知しる由よしをば聞き居たり、今其
 國くにに來るを聞きて大に喜び、薄氏ハツシを用ひて意欲

のまゝと黄金をば得んと思ひ、竊らよ之を誘ひ
謀いて、埵列士田と言ふ地と送り、普魯社の事
を心側らよ聞きて、只管之を取り逃さばと衣服
飲食の受用の更あり、総ての事と心を用ひ最慇
懃よも待遇ひ、其上護衛をよへ附け置きて厚く、
之を逃さばとい注意けたり、
此時偶ま波蘭の地の瑞典より攻撃のき、戦俄と
起りて、國王弗列徳力ハ波蘭の都と赴るる事
とありけし、心あらむも薄氏と別きて勿遠く

くも發興せり、かくて其乱も漸く鎮静らんと以
る頃、はひ王ハ波蘭の都ある、ワールソ一の地よ
りりて、遙々薄氏と書翰を贈りて、黄金を煉るべ
き秘傳をば密に教へ示さきん事を切に乞ひつ
つ他事なく逼まひ、薄氏も外に言ひ逃くべき様
もあく、せん方盡きて一箇の小罫と赤ま色の水
劑を入れたるを王と呈進め、是を即ち煉金の水
劑ハ候ある、銅もあま、何れもあま、凡ての金
屬を銷溶して之を化すま、忽ち變じて黄金と

ハあり候ありと信實やの言上けき、王の
喜悅一形あらび即ち侍臣を屏けつ、唯太子と
共々奥まうたる密房の内に入り、鑰もて入り
口を固く鎖し、此内は在りて鍋の中は銅をば入
きて能く溶解し、さて薄氏が贈りたる水劑を和
ぜ合し、今や黄金と化するべきのと、太子と共々
目も離さず、之を見まども効驗あらねば、こゝろを
もいゝよと疑ひつ、薄氏が水劑を副へて進呈
めたる方書を開きて仔細に閱る、此水劑を用

ふるよ、極めて其心を純正く、又其身を清
潔よくして、諸行ふはあらざれば、決して効能ある
ことありと書き記せり、さるは此前日は當りて
王の不浄の事は觸れざるを覺えしうば、さてハ
試験の効能あまの全く其ためありと思ひつ、
こまより沐浴齋戒し、罪を懺悔し、心を清め、身を
潔くして太子と共に、第二の試験をあいたり、
あど猶此回も初回の如く、絶えて効能あらざり
けき、王の大は氣色を損ふ是を全く薄査の方

を惜みて傳へぬあらんと、大に薄氏を恨みけり、
此頃波蘭の國へ瑞典より攻め襲はせ、大に敗れ
騒乱の末にて、金銀乏しく甚困窮たり、
バ、王の薄氏に強て迫り、右ても左ても其術をも
て黄金をば煉製へ、そをもて國の困窮をば救は
んとて、頻りに薄氏を促すも、薄氏も今更絶術
なく、竊り逃れて奔り出るも、固より護衛を甚
嚴重く隸属へ置きたる事あるべ、遂に捕縛の身
となりつ、然も王よりの命令をもて、此上も

術を秘して、黄金を造り出さばまの、絞罪を行ふ
べしと、最嚴重に言ひ渡させけり、さまどもいと
もと最初よりして、之を知りたる事あらば、又爲
し得べき事もあらねば、薄氏の只管當惑しつ
つ、徒に私に先非を悔ひつ、さまは其後徒に月日
も立ちて、一ヶ年の久しきを経まども、黄金をば
製造いたさず、王も最初に其術を秘し
て知らせぬ事との疑ひ思ひしも、此に至りて
稍薄氏が、詐偽を出でたる妄説あるを知まども、

元來王の薄氏を製煉術を精くきを知りたすけ
まげ、今之を罪を行ひたりとも何の益もあるべ
からず、寧ろ夫より其命を存生くめて、之を増
たる發明を爲さしめんよ、若らざるべしと、遂
は其罪を宥さきて、黏土をもて磁器を製する
術の發明をぞ命ぜらまける、その此折のら葡萄
の人支那にて製造し、磁器を、此波蘭國に持ち
來り之を賣り扱きたりしが、世の人甚ぞ之を珍
重して、其價のこまと均しき、量目の黄金をもて

交換しりけまば、王の即ち之を思ひ、若し此磁
器の製造を發明せば、猶黄金を製すると其益同
じあるべしとして、斯る命令をば下せしあり、是よ
り薄氏を磁器の製造方を發明せんとて、朝暮心
を用ひつゝ工夫し、餘念もあらずし、久々
効驗も見えざりけり、さるや或る時金類を鎔解
以て爲し用ふる土埴は、焼くべき赤土を持ち來
りたる者ありしが、薄氏に此土を見て思へる様
此土焼けて極熱に至る時、玻璃の如き性質

とありて長く丈夫又保てるものあり、さき其
 色澤白あらびて全き磁器との差異あるも、其
 堅硬き質又おきて、自然似通ひたる處もあま、
 此土をもて製造り見ばやと、偶然思ひ起し即ち
 こまて試験るも赤色磁器を造り出しつ、遂に
 賣品又まで出は至りさきど其色赤くして、
 直正ある白色の磁器との懸又異あま、薄氏の
 種々又心を碎き、恣磨て白色の磁器を製はる秘
 傳を發明し出さばやと様々經驗を爲しつ、も、

多くの年月を積むといへとも、更に効驗もあら
 ざでしが、その此時代の男の頭は假髪を被る風
 俗あまて、薄氏も平常假髪を用ひし、或る日新
 りき假髪を用ひたりしが、是まで用ひたるもの
 よりも稍重きを覺えし、隨從者は何故あま
 ば、今回の假髪ハ斯くばあり重きまやと問ふ、
 こを此中ハ髪を理めて整ふるの爲め、用ふる白
 粉の多きは過ぐるが故にて、其白粉ハ一種の土
 ありと答ふるも、薄氏忽ち思へる様、吾も白色

の磁器を製らんが爲め白き土を遍ねく試験す
 まども、猶吾が索むる土を得ば、此假髪の中はあ
 るもの、白土ありといふ時、萬一吾が索ぬるも
 のあらんも測り難くして即ち假髪を解き壞り
 て、之を微細な經驗るは此白粉の中より、薄氏
 が年來心を盡して索ね求め、ケイヲリンと云
 へる土を合とたりしむ、心は喜ぶこと大方あ
 らば、此一種の土の不足せしはありて、年來非
 常に力を用ひしも、今日まで効驗の見えざり

かりとて、直ち之を用ひて製造するは果して
 白色の磁器を造り出しけむ、取も敢へば之
 を王に獻上せり、時又一千七百零七年我國宝永
 四年ありかゝりし王の心も始めて解けて、
 大に喜び、此上の支那の製は劣らぬ程に造り出
 さんもさして難き事ありあらば、是は就きて需
 用の物あらんや、道具其外何はまき、希望は任
 せて與ふべしとありけむ、薄氏も始めて心を
 安んじ、是より全く金を煉る術をば廢して、唯一

途又磁器を製する業を勤務といつ、其工業舗
の入口は一對の詩をば作りて掲ぐ曰く全能の
上帝至大の造化者煉金人を化して陶人とせり
と、此詩は上帝といひ造化者といふは、共は此天
地間もありとありゆる萬物を生し出せる造物
主といふ神をよして云ふ全能の其作用の全
くして缺けぬ事至大の其徳の大にして限りなき
意一首の意の作用の全くして缺くる所なく徳
の廣大にして限りなき造物主の神の測り難き

神力にて金を煉る人を造り改めて陶器の人と
いふたり、嗚乎真は妙なる哉奇なる哉とあり、
さきども王の尚も薄氏が煉金術を知らずと云
ふは偽はて全く之を傳授するを惜むよりの事
あるも、萬が一ツの測り難く若くもさる事ある
時は他人は傳へんも知るべからず、又我が國
を逃げ出で、他國に往らんも知り難くして晝
夜を分たれ其住居は守護の兵隊を多人數詰
あきて嚴重に守らしめ、又六人の大臣は命せて、

薄氏を取逃はうしをとけぬのさぶる擔保たんぽうをおさしめ、もも逃避にげま
 らば六人ともも重き罪つとへの行ふべしとて、こま
 りも隙ひまなく意を黙けしむ、去る程ほどは薄氏の製造せいぞう
 する磁器せきぎの次第しだいは工風くふうは工風を添へてますよ
 ち精妙せいめうは造り出し、今ハ支那しな日本の製造せいぞうもを
 さをさ劣らぬのさあらば、或ら之これも優るべき
 程ほどある手工てきぎに至りしるば、王わうのいと盛大たいせいある工
 作場さくばを設け、此こゝは歐羅巴おうろぱ各國こくごの工人こうじんを招まねぎ集あつめ
 て、之これは手厚てあつき賃銭ちんせんを予へつ、大おほは磁器せきぎを製造せいぞう

して四方しやうほうの諸國しよこくは賣り渡りけまば、自然ぜんぜんと財貨さいか
 の塞さい楯しんは多く聚あつまり、國王こくわうの言いふも更さらなり、総すべて
 の民たみの利益りえきとあり、國くにの潤うるほとある事こと大方おほほうならざ
 りしるば、先年せんねん瑞典すえんより攻せめ入いらまて、散々さんさん國くにを
 破やぶらまさる、いと莫大もくだいある損耗そんこうをも、漸やうやく回復くわふくは
 事をことを得えつ、是こゝは皆みな薄氏はうしの功勳いさぎありとて、其恩賞おんあやうと
 して第五等ごとうの爵しやくあるベローリンべろりんの爵しやくをあ與あへら
 せ、世よは面目めんがくをあ施あせもの、只ただいふはせん其身み
 の常とこは囚人しうじんの如ごとくして、守衛しうゑいの人ひとの其傍側きぼうがわを離はな

是ぞ工事終りて吾の臥房に入まば、外よりこま
 ざ錠を施して、復び出る事を許さざ、斯く嚴重か
 る取扱は薄氏も殆ど困果、今少々の寛容
 ある取扱をば受けさき由を、屢書面は書き記し
 て王への願ひ望まけるが、其書の文意の中は於
 て、最哀より悲しきものあり、曰く下僕磁器を造
 り出以業よりおけて、一生懸命の精神を用ひ、聊も
 力を惜む事なく、又前古の發明者より造り出せし
 所よりも、更は多分は造り出して聊も厭ふ事か

あるべし、さるるあらは願はくは、下僕の身は自由
 をば與へ玉へと、このく憐れむべき書面を以て王
 より乞ふ事切あまども、王は薄氏は自由を與へば、
 復は如何ある事をあし出さん、測り難くと、深
 く心之を疑ひつ、唯々こまは金錢を厚く與へ
 て懇篤は取扱ひつ、更は其身の自由をば與へざ
 りけり、
 さまは薄氏を是よりして、始めて世を無聊きもの
 のと思ひ、今の吾身の此世の中は存在あらんも

何の詮らあらんとて始めて酒を縦に飲み、朝ま
 だきより盃を手に觸れて、酔へぬ日として、あら
 ざりけるに、上の好む所下をよきより甚しき
 常習にて此風忽ち工人に及ぼし、多人数の工人
 へ、大形日々に酔へざる者なく、酔へば互に争ひ
 合ひ、誼諱口論の絶ゆるまかけまば、已むを得ば
 して兵隊を附け置きて、其騷乱を鎮めしむる
 までに至る、さきば暫時の間として酒の爲め
 罪を得て、繋囚とある工人三百人の多き上は

りとりや、斯くて薄氏に是より漸く酒の爲
 めに疾病を受け、久しくして瘥えざりしが、一千
 七百十九年我國享保三年に當りて、終に黄泉の
 客といありぬ、時其年三十五歳かばうに塞楯
 の功勲ありて、爵をさへたもてる人ありしに
 ど、死しての後之を葬るる恰も犬を棄つるが如
 く、夜中其遺骸を舁き行きて、以て匆略より塚
 地に埋こしとぞ、塞楯の大恩人にて斯計り疎略
 扱はるるに、歎息すべし限りありけり、

薄氏ハツチの既ス身ミまの里リうども、磁器工場セトモノノバら依然ヨシよて益々盛んまさ製セし出デしけき、塞楯サキツの國クニの利潤リジュンとあるもの一形ひとがたあらば、さきか歐羅巴諸國ヨーロッパもても、之これ倣まねひて其國そのくには磁器工場セトモノノバを開ひらくもの次第ついで多く、當今いま法國フランスよての現いまは精良磁器せいりやうせいモノを製セして、其國そのくにの財貨さいわを殖ふや一術ひとわざといふせり、

⑤ 若社空地烏德

英國イギリスよて有名なまある陶工空地烏德氏セトモノノウヂハ、巴律西パリシまに薄查ハツチヤの二氏ふたりの身世よみぐは比くらぶる時ときハ、其生うままよる

時代トキもよく遙とほく福分ふくぶんありとぞ言いふべき、空地氏ウヂハ

一千七百三十年我國享保十五年あま當りて英國イギリス斯答福德舍スタッドフォードある培斯連ポアスレムといへる邑むらは生うまる、その

此この斯答福德舍スタッドフォードの地ちは、従前まへより陶工セトモノノ多く住すま

まけるが、其製セし出デせる陶器セトモノハ黏土ねいどを煉ねり、其乾からざる内模範うちかたを作つくりて製セするものよて、色いろ黒暗くろくろ

くして質粗醜さざあく、いゝよも鄙野びんの品しなありが、空地ウヂ

氏の父ちちも其陶工セトモノノの一人ひとりよて、子こ十三人じゅうさんにんありたり、空地ウヂ氏の父ちちも其第十三人目じゅうさんにんめの末すえの子こよてぞありけ

る、まゝに父をば幼き時、失ひて、兄の教、又従ひ
 つ、かつ、陶工の業を、し、學び始め、僅
 九歳の時あり、幾程も、重く痘瘡を病
 きたり、是より右の膝、疾を受け、年を累
 ねて、平愈、至らば、時々重く、發りて、甚く
 難儀して、ける、右の足を、截斷、せ、全く治せ
 ざるの、まらば、命も終、覺束、あ、との、醫師
 の、診斷、は、已むを得、終、右の方の足を、截り、
 病、全く痊、え、た、ま、是より、不具の身、とい、あ

あり、
 元來、一千七百五十年、我國、寶曆、明和の頃、當る
 時代、造、英國、工業の事、也、歐羅巴の諸國、及
 び、ざる事、鮮、あらざる中、も、陶器の製、殊、は、拙
 く、上等の磁器、和蘭の、埴、爾、弗、的、より、出、づるを
 用ひ、ま、酒、盃、日、耳、曼、の、哥、洛、澤、より、來、るを取
 り、來、るもの、あり、が、空、氏、の、既、不、具、の、身、と、あ
 り、一、途、は、其、業、を、勉、め、種、々の、陶器、を、作、り、出
 して、其、活、計、を、營、て、ける、が、此、頃、と、ても、上、等、か

る白色の磁器を製する者、英國よりあらざざし
 ろの憊磨之を發明せば、やと志し、是より其業
 の暇をもて製煉術、心を用ひ、専ら之を學び習
 ひ種々の黏土を微細に究察て、其焼きあげたる
 光澤よりして、銷鎔の具合を詳しく知らんが爲
 め、幾回とあく試験をあいつ、厚く心を盡しけ
 るが、斯くて久しく月日を経る内、或る時一種の
 黒き土の焼上げたる後、白き色に變するものを
 查出しけまば、是より更なる工夫を凝らし、種々

心を碎きつゝ、始めて其色純白にて、玻璃の如く
 ある光澤ある陶器を製し出せり、是を今日イ
 ングリスニアアセンウエニア即ち譯して英國陶
 器といへる、世界に名高き稱を得て、交易場
 て珍重せらるる、磁器を作り出す、濫觴ありあ
 りける、まきは是まで英國にて、皆悉く外國よ
 り買入をきたたり、陶器類を是より一切自國よ
 て製し出せのよからば、却りて自國にて製する
 品を専ら他國に輸出し、事とさへあり、工業ます

ます繁昌して、一千七百八十五年、我國天明五年
 又當りて、製磁工場にて役使ふ工人総て貳萬人
 の多きに至り、然も其賃銀の最手厚とぞ給與し
 ける、
 此工場にて斯の如く、多くの工人をば使役ひけ
 きども、ウエ氏之をりて足きりとせば、ウエ言ひ
 ける、ウエ吾が英國近來に至り、政法と云ひ、風俗と
 云ひ、高き位と進めるもの、實一形あらばと言
 ふべし、ウエこまらの進歩と比較ぶる時、此工場ハ

盛んありと云ふは足らざるのこからせ、猶嬰兒
 の足さへ孱弱く、獨行りかゝ難きものと言ふへ
 く、さきの是より力を盡して其生長を願ふべ
 きありと言ひ、其後果して其言の如く、この
 工場ハ次第又繁昌と赴き、一千八百五十二年我
 國嘉永五年又當り、英國よりして他の國々へ輸
 出せる磁器ハ総て八億四百萬の多きに至り、然
 る他國へ持ち行きて賣捌くものハ此数又入ら
 ずとぞ聞えし、

是も工場くわじやうの盛大さかんあるは随まひて、自然ぜんは金銭きんせんの融と
 通ともよく、是こゝより自然ぜんは其土地ちとの人情にんじやうと云いひ、風
 俗そくと云いひ、開化かいけは進すすむに當あ然らの理りにて、斯す答た
 福德ふくとく舎しやの土地ちとも、宍し氏しの業ぎやうを開ひらき始はじむる時とき分ぶん
 ありて、貧まるくき民たみの家いへ多おほく、然しかも家數かすう少すくか
 て、野蠻やはんの景況けいきおのつら免まぬるは難かき色いろ見みえ
 る、製磁せいじ工場くわじやうの基礎きそたちて益々ますます繁昌はんぢやうするは従したがひ、
 土地ちとの人民たみもこゝよりよりて活計かつけいを立たつる者もの次つぎ
 第たひは多おほく、家數かすう以前いぜんは三さん倍ばい、其人情にんじやうと風俗そくと、

陶器たうきの製せいと共々ともは漸ゆるく高等こうとうの地ちは進すすむ行いきぬ、
 額がく拉ら德斯と敦とんと云いへる名高なかつたき學がく者しやのある時ときの演えん
 説せつは、宍し氏しの事ことを稱譽せうよして言いひけるは、宍し地ち烏う德とく
 氏しの名工なまとあり、英い國こくの大おほかる利益りえきを興おこすは至
 まり、其つ畢ま竟り難病なんびやうを受うけ、由よしる、此病このびやうを得え
 たるこそ、宍し氏しの其肢體しんたい強用きやうようを頼たのみます、更さらは
 是こゝより大おほかる工夫くわふは心こゝろをば用もちひ只ただ一ひと縷いとは此術このじゆつ
 又また力を盡つくして他たは顧こゝろみず、終つひは其秘奥ひおくを宍し氏しに
 往古わうこ雅典やてんの陶工たうこうと雖いへども、遠とほく及およばぬ地ちを占しめ

明治十五年十一月廿日 版權免許
同 年十二月 出版



和解人

静岡縣士族

中邨秋香

麴町區三番町七拾一番地

出版人

静岡縣士族

木平讓

礪川區江戸川町十九番地

發兌人

東京府平民

福田仙藏

神田區通新石町廿番地



發

賣

西京 同大坂 同名古屋 静岡 熊谷 鴻巣 東京

出雲寺文治郎 勝村治右衛門 前川善兵衛 岡島真七郎 片野東四郎 本屋悦三郎 松枝為一郎 長島茂兵衛 北畠佐兵衛 稻田源吉 小田新兵衛 丸林家善七 山中市兵衛 吉川半七

書

肆

東京 高巢 類谷 輔岡 字古 同 大社 西京

福	青	文	別	内	北	石	金	内	水	東	江	柳	牧	牧
田	山	學	所	田	澤	川	港	藤	野	生	鳥	川	野	野
仙	清	平	弥	伊	治	堂	恭	慶	龜	喜	梅	善	吉	吉
藏	吉	社	七	衛	八	衛	三	郎	郎	郎	衛	郎	衛	衛

